

刊行にあたって

山本 博之

本書は、1950年代から1960年代に活発化した東南アジアと東アジアを結ぶ華語¹⁾ 出版ネットワークの形成と展開を明らかにするとともに、シンガポール（後にマレーシア）で刊行され、1955年の創刊から今日まで刊行が続いている華語文芸誌『蕉風』を用いて、1950年代から今日に至る東南アジア域内および東南アジアと東アジアの間の文芸交流を跡付ける共同研究の中間報告である²⁾。

2000年代以降、大陸中国が中華世界の中心であることを自明視せず、華南から東南アジアにかけての地域などの大陸中国の外部（「外中華」——後述）に居住する華人に着目して中華性を捉えようとする研究が活発化している。文学研究で華語圏を扱うサイノフォン（sinophone）研究では、地域の文脈に即して地域ごとの華語文学の系譜を捉えた上で、それを地域の文学史に留めず、地域を架橋する中華文化の実践を捉える分析枠組や方法論としてサイノフォンという視点の構築が目指されている。さらにサイノフォンを「華夷風」と読み替えることで、文学だけでなく文化や社会をも研究対象に含め、中国と外部の文化混成社会における中華性の実践に目を向ける取り組みも始められている（王徳威ほか編『華夷風——華語語系文學讀本』台北：聯經出版、2016年）。

東南アジアでは、非国語あるいはマイノリティ言語による新聞・雑誌は図書館等に収集・所蔵されずに

死蔵または放置されているものも少なくない。言語の別を問わずにプロ作家がほとんどいない東南アジアの文壇において、60年間以上にわたって500号以上が刊行されてきた華語文芸雑誌『蕉風』は貴重な情報源である。

1955年に創刊された『蕉風』は、シンガポール発行でありながら香港でも読まれるほどの文学性を誇っていた。その成長期には、主に香港経由で東南アジアに渡ってきた華人作家たちが関わることで土台が築かれた。『蕉風』はまた、台湾留学組を中心にマレーシア華人を主な読者とし、編集人に常に新しい人材を入れ続け、台湾と東南アジアの結節点となっている台湾熱帯文学を支える場を提供してきた。

『蕉風』は1950年代末に発行地をマラヤ（現マレーシア）に移し、華語が国語でない地域で最も充実したマレーシアの華語教育制度に支えられ、華人の民族文化の発表の場として、主に現地在住華人の投稿によって成り立ってきた。台湾文学・中国文学のみならず、マレー文学やインドネシア文学などの東南アジアの他民族の文学も紹介する場を提供するとともに、モダニズム作家の牙城として、1980年代まで本流と捉えられてきたリアリズム文学と常に対峙してきた。

本研究は、CIRASセンターおよびその前身である京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）で実施されてきたいくつかの公募共同研究の蓄積を踏まえて構想されたものである。それらの共同研究は、東南アジア華人の現地社会への同化と統合に関する研究および雑誌記事データベースの作成を通じた社会史の研究の2つの分野に大別できる。以下では筆者が加わった共同研究のいくつか簡単に触れつつ、本研究の実施に至る背景および本研究が目指すところを紹介する³⁾。

3) 京都大学東南アジア研究所（現東南アジア地域研究研究所）の「東南アジア研究の国際共同研究拠点」(IPCR) で筆者が関わった共同研究を含む。

1) 華僑・華人の呼称についてはさまざまな議論があるが、本稿では大陸中国・台湾・香港の出身者とそれ以外の地域の出身者を合わせて捉えるため、前者を含めて中華系住民を「華人」と呼び、その共通語を「華語」と呼ぶ。

2) 本書は京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」(CIRASセンター) の公募共同研究「東南アジアの中国語文芸誌研究——『蕉風』を中心に」(研究代表者：舛谷鋭) および公募共同研究「1950年代・60年代のシンガポールと香港を結ぶ出版ネットワーク」(研究代表者：篠崎香織) がもともになっている。本稿の一部は2つの共同研究の報告書を再構成したものであり、舛谷氏と篠崎氏の本書所収の論考と記述が重なっている箇所がある。

外中華とプラナカン—— 東南アジア華人の現地社会への同化と統合

東南アジアでは、中国の政治経済的な影響力の増大に対して現地在住の華人の間で歓迎と警戒が入り混じった態度が見られる。このことを理解するには、東南アジアの華人が国内の多数派民族にどれだけ同化・統合しているかという「華僑から華人へ」というアイデンティティの変化で捉えるのではなく、居住地の環境に応じて華人性を選択的に維持してきた結果として東南アジアの華人を捉える方法がある。中華世界という観点から捉える「外中華」と、マレー世界（島嶼部東南アジア）という観点から捉える「プラナカン」の2つのアプローチである。

大陸中国・台湾・香港では華人が多数派を占めるために中華文化の実践が容易であるのに対し、東南アジアでは、中華文化の実践のための道具立てが十分に揃っていないことや、外来者で少数派である華人による文化実践に対して多数派から疑いの目を向けられるのではないかという心理的な制限などのため、中華文化の実践に制約がある。このような観点から、華人が居住する東南アジアを中華世界の一部と見つつ、大陸中国・台湾・香港の外にある中華世界という意味で、「外中華」と呼ぶことにする。外中華では、中華文化を維持発展させたいと思っても設備の不足や社会の眼差しなどのために部分的にしか実施できず、どの要素を残してどの要素を手放すかという選択と決断の積み重ねの結果として中華文化が現れる⁴⁾。

インドネシアの華人を題材とした映画に、家系を継承するには男児の出産が必要であるという信念を持つが、男児を設けることなく妻に先立たれた華人男性が、現地のムスリム女性と再婚し、男児を得て家系の継承という責務を果たしたことに安堵するのと引き換えに、結婚によってイスラム教に改宗したことでそれまでの信仰や慣習を失うというものがある。この物語が示すように、東南アジアでは華人が現地社会に同化しているように見えても、それは中国から居留地へとという一方向の同化ではなく、中華文化のどの要素を残してどの要素を手放すかという選択

の積み重ねの結果なのである。

個人による選択と決断は個別の実践の観察によって捉えることができるが、集合的な選択と決断を捉えるには活字メディアや映像メディアが重要な資料となる。マレーシアの華語文学についても、マレー人が多数派を占める現地社会において少数派である華語文学が維持されてきたと見るのではなく、世界各地から人々や文物が集まるマレーシアで、マレー語文学やそれ以外の文学・芸術との関係において中華文化が選択的に維持されて展開してきた過程の反映と捉えることができる⁵⁾。

また、マレー世界において外来の移住者による現地社会の多数派に対する選択的な同化を社会全体の統合という観点から捉えたものがプラナカンである。プラナカンとは、マレー語で「混血者」と「現地生まれ」の2つの意味をあわせ持ち、マレー世界を訪れた外来者が現地住民と家庭を築いて設けた子やその子孫を指す。プラナカンは一方の親（多くは父親）の家系を通じて外部世界の文物に触れ、もう一方の親（多くは母親）の家系を通じて地元文化を身に付けており、外来文化と地元文化の両方の要素を兼ね備えている。プラナカンは地元文化を選択的に取り入れながら多数派に部分的に同化していき、社会全体が緩やかに統合されていく。その過程で、プラナカンが持ち込んだ外来の文物を取り入れることで多数派も変容する⁶⁾。

歴史的に見ると、中華系のプラナカンはマレー世界において地元文化を受け入れつつも中華文化を選択的に維持し、現地社会への同化が進む過程で、多数派であるマレー人に中華文化の影響を及ぼしてきた。この仕組を現在の中国と東南アジアの関係に援用するならば、東南アジアにおける中国の影響力が増大している今日、マレーシア華人が中国に進出する機会が増えているが、それは在外の華人が中国に帰還して中国人に戻るということではなく、かつて中華系プラナカンがマレー世界で果たした役割と同じように、マレーシア華人が中国で地元文化に同化していく過程で中国に東南アジア文化の影響を及ぼして

4) 共同研究「大衆文化のグローバル化に見る包摂と排除の諸相——マレーシア映画を事例として」(2010年度)

5) 共同研究「混成アジア映画に見る世界——潮流としてのマレーシアを中心に」(2012年度)

6) 共同研究「マレー・イスラム圏における国民・民族概念の展開——プラナカン概念の再検討を通じて」(2010年度IPCR)

いくと捉えることが可能になる。

東南アジアにおいて中国の影響が増すことの意味を考える上では、東南アジアにおける華人の現地社会への同化・統合について、政治・経済面だけでなく社会・文化面を捉えることも重要であり、1950年代から今日まで刊行が続く文芸誌『蕉風』はそのための貴重な研究資料である。

「編集された知」—— 『イスラム雑誌『カラム』』の記事データベース化

『蕉風』は1999年から2002年まで一時休刊しており、1955年の創刊から1999年の一時休刊までの旧版の刊行時期は東西冷戦の時期にほぼ相当する。本研究ではそのうち1950年代と1960年代に焦点を当てている。

東南アジア諸国の多くは第二次世界大戦中を経て1940年代に独立し、1970年代に開発の時代を迎えた。1950年代と1960年代は、国家のあるべき姿を巡って文字通り武力による戦いが繰り返されていた1940年代と、国家の経済開発と安全保障が優先されて国家のあるべき姿についての多様な意見による議論が低調になった1970年代以降の時期の狭間にあたる。独立した国民国家の枠はできたものの、その内実はまだ十分に固まっておらず、また、国家の枠を越えた組み換えへの願望や可能性も残っている時代であり、自分たちを取り巻く世界をどのように捉え、そこに自分たちをどのように位置づけるかについて言葉で議論を戦わせた時代でもある⁷⁾。

新聞・雑誌は20世紀初頭前後にマレー世界に持ち込まれ、20世紀を通じて重要な活字メディアとなった。当初は設備や権限を持つ一部の人々しか発信できず、「編集された知」が発信された。「編集された知」とは、出版時にレイアウトを整えたり文法上の間違いを修正したりした情報のことではなく、与えられた枠内に収まるように選ばれて整えられた情報を意味する。発信する情報を選択し編集するのは直接的には編集者や発行者であるが、編集者や発行者が意識的に情報を選別している場合もあれば、無意識のうちに選好が働くこともある。

新聞や雑誌であれば紙誌面、テレビやラジオであれば放送時間といった枠があり、それを分け合う形で絞り込まれた情報が発信される。そのため、個別には重要度が高い情報でも相対的に重要度が低い場合に発信されないこともある。また、発信に設備や手続きが必要で、さまざまな人が関わることから、発信にコストがかかる。発信結果が読者や視聴者に購読・視聴されることで収益があり、それによって発信が継続される仕組みのため、発信のターゲットである読者・視聴者に購読・視聴されることが重要であり、発信内容に間接的に社会の意向が反映されると考えられる。新聞・雑誌の記事から刊行時の世相を明らかにする研究はこの考え方がもとになっている⁸⁾。

これに対し、とりわけ1990年代以降の通信技術の発達により、今日では情報の発信が容易かつ低コストになり、枠をほとんど気にすることなく発信が可能になっている。これによって特別の設備や権限を持たないさまざまな人が個人として意見を表明する機会を得た一方で、「編集された知」ではない情報が膨大に発信されるようになった。もはや1つ1つのテキストを全て読んで全体像を掴むことは不可能であり、膨大なデータをどのように整理して全体像を掴むかが課題となっている。ただし、データの総量が大きくなると、「ある／ない」はわかってもそこに価値を読みこむことが難しくなり、せいぜい「好き／嫌い」の二者択一がわかる程度である。しかもその情報は「揮発性」が高く、与えられたデータ群の傾向がわかったとして、それをもとに現実世界における人々の考えや行動の理解にどのように反映させられるのかといった課題がある。

膨大なデータから人々の考えや行動を捉えるという課題の橋渡しとして、月刊誌『カラム』の記事から「意味の束」を抽出する研究がある。『カラム』は、1950年から1969年まで刊行されたジャウィ（アラビア文字表記のマレー語）のイスラム月刊誌である。シンガポールで創刊され、後にマレーシアに発行地を移した。図書館等に体系的に所蔵されていないため、共同研究を通じてほぼ全ての号を収集して全ての誌面をデジタル化し、さらに全記事をローマ字に翻字

7) 共同研究「脱植民地化期の東南アジアにおけるムスリム社会の動態」(2010-2011年度)、「島嶼部東南アジアにおける国民国家形成とマレー・ムスリムのネットワーク」(2012年度)。

8) 共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像」(2013-2014年度)、「1950・60年代の東南アジア・ムスリムの社会史」(2015年度)。

した記事データベースを作成・公開した⁹⁾。

『カラム』の連載記事のうち創刊号から最終号までほぼすべての号に掲載されていた「千一問」は、読者からの質問に『カラム』編集部がイスラム教の見地から回答するもので、質問からは当時の社会の関心を、回答からは当時のイスラム知識人の認識を伺うことができる。共同研究では「千一問」の全記事の日本語訳を進めるとともに、質問と回答の分類に取り組んできた。マレーシアの大学図書館では米国議会図書館分類表によって蔵書を分類しているが、これに従って「千一問」を分類すると特定の項目に記事が集中して、全体像がうまく把握できない。これに対し、イスラム法学者が一般信徒の質問に対して提示する法的見解(ファトワ)の分類方法を援用することで、「イスラム的な知」の分類方法を用いて「千一問」の質問と回答を分類する研究も取り組まれている¹⁰⁾。

本研究は、『カラム』に関する共同研究の経験を踏まえて、『カラム』と同じ時期に同じ地域で刊行され、ジャンルの重なりがあり(イスラム雑誌と文芸誌)、ただし『カラム』と異なる読者層を対象として異なる言語で書かれた『蕉風』を題材としている。『カラム』研究プロジェクトにおける記事データベース作成や記事分類などの研究を踏まえて、情報技術を用いた『蕉風』の記事分析を進めると同時に、データベース化したときにデータベースに載らずに切り落とされる情報の扱いなど、定期刊行物記事の情報処理についても寄与することも期待されている。

『蕉風』 ——東南アジアと東アジアの国際共同研究

東南アジアの華人についての研究では、現地社会の多数派住民への文化的同化が進んで華語による読み書きを行っていない人々が相当数いることを反映して、華語ではなく各国語の文献が資料とされることが多い。これに対して『蕉風』は華語で執筆されていたため、シンガポール(後にマレーシア)を刊行

拠点としながらも、読者はシンガポール/マレーシア以外の東南アジアや東アジアに及んでいた。『蕉風』を利用した研究を行う上では、シンガポール/マレーシアの研究者だけでなく、東南アジアおよび東アジアの研究者との国際共同研究が必要となる。

本研究では、舛谷鋭氏、篠崎香織氏、筆者の3名がこれまでそれぞれマレーシア華人に関する共同研究を行ってきたマラヤ大学、新紀元大学学院、南方大学学院の研究者をはじめとする東南アジア・東アジアの研究者と国際共同研究を進める準備として、『蕉風』研究の基盤整備および香港研究者と台湾研究者を交えた共同研究を行った。

『蕉風』研究の基盤整備では、複数の共同研究プロジェクト¹¹⁾の協力によって購入された『蕉風』のバックナンバーが京都大学東南アジア地域研究研究所図書館の所蔵となり、また、新型コロナウイルス感染症がまだ収まっていないマレーシアを舛谷鋭氏が訪れて関係組織との交渉と調整に尽力し、『蕉風』全誌面の電子版を立教大学と京都大学の学内で閲覧することが可能になった。

日本に『蕉風』の研究基盤が整備されたことは、研究者のポジショナリティと日本における東南アジア研究(より一般的には地域研究)の意義に関連して重要な意味を持つ。かつての地域研究は開発途上国を研究対象とするものが多く、研究対象諸国では教育研究の水準が十分でないために欧米や日本の科学技術に学ぶことがしばしば見られた。しかし今日では研究対象諸国の教育研究が大きく発展し、分野によっては日本に学ぶことの優位性が失われていると思われるものもある。現地出身の研究者が活躍するようになった状況で、日本に拠点を置く地域研究者が現地社会の研究を行う意義はどこにあるのかが問われることになる。

研究には費用がかかり、また、研究者は生身の人間であるためにその生活を維持するための経費がかかることから、研究は研究費の提供者をはじめとする環境的な制約から完全に逃れることはできない。研究は必ずいずれかの場所に拠点を置かざるを得ず、その場所性によって有形無形の影響(制約)を受ける

9) 共同研究「東南アジアのムスリムをめぐる社会的亀裂とその対応」(2016年度)、「東南アジアの国民国家の形成過程における民族・宗教の対立(2017-2018年度)」、「東南アジアの脱植民地化におけるイスラムと政治」(2019年度)。

10) 共同研究「東南アジアのムスリム社会における女性の社会的地位」(2019年度)、「東南アジアの多宗教社会におけるムスリム女性の家族形成と宗教実践」(2020年度)、「東南アジアのムスリム社会の近代化とジェンダー規範の変容」(2021年度)。

11) すでに挙げたもののほかに共同研究「冷戦下における華人の文化表象「空白期」についての比較研究——インドネシア、タイ、フィリピンを中心に」がある。

ことになる。ここでいう影響とは、データを得るための適正な方法を歪めたり、得られたデータの解釈を恣意的に行ったりするような個別の研究の妥当性を損ねるものではなく、研究のトレンドなどのテーマ設定の方向付けなどを指す。

研究がその拠点を置く場所の影響を完全に排除することができない以上、研究の拠点を置く場所をなるべく多様にすることが研究全体にとって肝心である。そのためには、欧米や東南アジアで東南アジア研究が行われるだけでなく、日本でも東南アジア研究が行われることは、世界全体の東南アジア研究（ひいては地域研究）の発展のために大きな意義がある。

とりわけ華人研究に関しては、東アジアと東南アジアの間で国境を越えた出版ネットワークが存在した一方で、政治体制の違いなどのために行政上の地域ごとに利用可能な資料が異なる状況があり、中華世界のすぐ外側である日本に研究資料が整備されていることの意義は大きいと言える。

本書の構成

本書は4編の論考・書評および資料編から成る。執筆者は、共同研究メンバーのうち、ペナンやシンガポールの海峡植民地を中心にマラヤ／マレーシア華人の歴史と社会の研究に取り組んできた篠崎香織氏（第1章）、香港研究を拠点として華南から東南アジアにおよぶ華人世界の研究を行ってきた谷垣真理子氏（第2章）、日本における「馬華文学」¹²⁾研究の第一人者として『蕉風』の研究を続けてきた舩谷鋭氏（第3章）、マレーシア出身の台湾在住作家による小説の翻訳も手掛けている及川茜氏（第4章）、そしてボルネオ島に焦点を当ててマレーシア研究を行ってきた筆者（資料編）である。

第1章はシンガポールと香港をつなぐ教科書供給ネットワークの形成と展開を論じる。1910年代以降に東南アジア各地で華語で教える小学校が設立されると、シンガポールでは1920年代に華語書店・出版社が設立され、中国から教科書を輸入して東南アジ

アに流通させる拠点となった。しかし1949年に中華人民共和国が成立すると、東南アジア諸国では中国から教科書を輸入することが厳しく制限され、シンガポールの書店・出版社は東南アジア各地の教育カリキュラムに準じた教科書を開発することになり、文学者の一部も香港からシンガポールに拠点を移した。シンガポールは1950年代後半以降に香港の出版産業を自国の出版産業の脅威と見るようになり、1970年代初頭までには教科書を国内で作成するようになった。

第2章は友聯社の創立と東南アジアとの出版ネットワークを論じる。米ソ冷戦期、アメリカはアジアで積極的に文化広報宣伝活動を展開した。アメリカの支援を受けて1940年代後半に香港で設立された友聯社は、アメリカの財団からの支援が終わった後も活動を継続し、複数の定期刊行物を発行した。本章は、友聯社幹部へのインタビュー集をもとに、友聯社の設立の背景を明らかにし、シンガポールやマレーシアでの友聯社の活動をまとめている。日本軍政終了後の香港の外省人コミュニティを背景に持って創立された友聯社は、東南アジアには華人コミュニティがあつて華語教育が行われていたことから、華語書籍（とくに教科書）の需要を見込んで東南アジアに事務所を構え、『学生周报』とともに『蕉風』を刊行した。

第3章はマレーシアのサイノフォン文芸誌『蕉風』の書誌ノートである。言語を問わずプロ作家がほとんどいない東南アジアの文壇において奇跡的に60年間にわたり500号以上が刊行されているマレーシアの華語文芸誌『蕉風』について、関連する『蕉風』の主要な記事を訳出して紹介しながら、『蕉風』発刊の経緯、冷戦下での『蕉風』の道のり、マラヤの華語文学雑誌としての『蕉風』の位置づけ、『蕉風』を巡る人的リソース、『蕉風』の1999年の休刊から2003年の復刊に至る経緯、近年の『蕉風』研究の高まり、『蕉風』の所蔵状況などについて項目ごとに整理している。

第4章は林春美による『《蕉風》与非左翼的馬華文学』（台湾：時報文化、2021年）の書評である。林春美はマレーシアのペナン出身で、現在はマレーシアのプトラ大学で中国文学を教えている。散文作家でもあり、2003年に復刊した後の『蕉風』の編集を担当した経歴も持つ。作者、编者、読者という複数の立場で、研究と出版活動の両面から『蕉風』および馬華文学に関わってきた。本章は、同書の内容紹介を通じて内側

12)「馬華文学」をどう捉えるかはそれ自体が研究の対象であるため、具体的には本書の各論考を参照していただくことにして、ここではさしあたり「マレーシア華語文学」という説明に留める。

から見た『蕉風』および馬華文学を提示するとともに、台湾の出版界における同書の位置づけを考察し、同書は馬華文学研究者のネットワークを可視化したものであると論じる。

第5章は、巻末の『蕉風』総目次(1955-1999)をもとに、『蕉風』の歩み、特集記事に見られる『蕉風』の関心、「馬」と「華」から見る馬華文学について概観する。『蕉風』は、主に西洋文学と華語文学の大きな潮流を受け、ラテンアメリカ文学やソ連文学そして日本の文学・映画にも関心を向け、マレー語文学との関係を意識しながら、「馬」と「華」の意味を臨機応変に読み替えていくことで時代の要請に即した馬華文学を発展させようとしてきた。マレー語で創作する華人作家が登場する一方で、ボルネオ(特にサラワク)との関係では、サラワクの独自性を強調するとマラヤの作家から異質扱いされ、マラヤの作家の中に入ろうとするとサラワクの独自性が失われる状況も見られ、本章は馬華文学のありうる姿について思いを巡らせている。

巻末には『蕉風』の第1号(1955年11月号)～第488号(1999年2月号)の総目次を掲載した。

蕉風・椰雨・犀鳥声

最後に馬華文学のありうる姿に関して本書の題名に一言触れておきたい。馬華文学に関連して「蕉風椰雨」という言い方がある。「蕉」(バナナ)も「椰」(ヤシ)も東南アジアを代表する植物であり、「風」も「雨」もまた東南アジアを代表する天候である。かつて中国から東南アジアに渡った人々は、移住先の土地で風や雨に象徴される大変な苦労を経験したが、それらを乗り越えて現地に根を生やし、バナナやヤシの実を結ぶまでになったという東南アジア華人の苦労と成功を象徴する表現である。

ここで「風」と「雨」は東南アジアでの暮らしの厳しさを示すものとして挙げられているが、「風」と「雨」は東南アジアに固有のものではなく、地域によっては荒々しい天候を示すとは限らない。例えばこれに「声」を加えて「風雨声」とすると、中国の漢詩の世界が立ち上がってくる。その「風」と「雨」の上にそれぞれ「蕉」と「椰」が載ることで、1300年以上の昔から連続と続く中華文化の土台の上に東南アジ

アで育った実が結んでいる様子が思い浮かぶ。さらにそれを「蕉風」と「椰雨」の2つに切り離すことで暴風雨のイメージが失われ、『蕉風』の表紙に毎号のように描かれたさまざまな姿のバナナの葉のように、豊かな熱帯でバナナの葉が風にそよぐ涼しげな木陰の光景が思い浮かんでくる。

馬華文学が実を結んだ後には、羽ばたいて別の地域に実を運び、あるいは別の地域から実を持ち帰り、馬華文学はさらなる発展の段階を迎えることになる。そのことを念頭に置き、本書の題は「蕉風・椰雨・犀鳥声」とした。犀鳥(サイチョウ)は東南アジアに広く見られ、ボルネオ島のサラワクの州鳥でもある。サラワク出身者が橋渡し役となることで馬華文学がさらなる発展を遂げることへの期待も込められている。

本書の刊行およびそのもととなる共同研究の実施では京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」(CIRASセンター)による支援を受けた。

前言

《蕉風》與冷戰時期東亞和東南亞的華文出版網絡

本研究通過華文文學雜誌《蕉風》追溯了1950年代和1960年代連接東南亞和東亞華文出版網絡的形成和發展，並回顧1950年代至今東南亞內部和東南亞與東亞之間的文學交流。該雜誌最初在新加坡（後來在馬來西亞）出版，並從1955年開始持續出版。這項研究由京都大學東南亞地域研究研究中心（Center for Southeast Asian Studies: CSEAS）主持，為馬來西亞／新加坡，香港和臺灣的歷史，文化和社會研究人員組織的聯合研究項目。通過這個項目，《蕉風》的所有期刊都提供給立教大學和京都大學，這本書包含了該雜誌從1955年創刊到1999年暫時關閉的完整目錄。我要感謝新紀元大學學院文平強教授，南方大學學院許通元先生，立教大學舩谷銳教授和北九州市立大學篠崎香織教授在進行這項研究時提供的幫助。

Introduction

Chao Foon Magazine and the Chinese Publication Network in East and Southeast Asia during the Cold War.

This study traces the formation and development of a Chinese publishing network linking Southeast Asia and East Asia in the 1950s and 1960s. It follows literary exchange within Southeast Asia and between Southeast Asia and East Asia from the 1950s to the present day, using the Chinese literary magazine *Chao Foon*, which was first published in Singapore (and later in Malaysia) and has continued to be published since 1955. This study, hosted by the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, was organised as a joint research project by researchers on the history, culture, and society of Malaysia/Singapore, Hong Kong, and Taiwan. Through this project, all issues of *Chao Foon* have been made available to Rikkyo University and Kyoto University. Further, this book contains a catalogue of the magazine's complete table of contents from its inception in 1955 to its temporary closure in 1999. I would like to thank Professor Voon Phin Keong of New Era University College, Mr. Kho Tong Guan of Southern University College, Professor Satoshi Masutani of Rikkyo University, and Professor Kaori Shinozaki of the University of Kitakyushu for their help in carrying out this study.